第六回　ウマ娘短編合作　ウマ娘のお花見

BuddPioneer

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

みやび（雅媛）様主催のディスコードサーバー（ｈｔｔｐｓ：／／ｄｉｓｃｏｒｄ．ｇｇ／ＴｃＴｒｘＵ７ＭＵＲ）で行った第六回短編連作企画です。

テーマはお花見。

全８名の人が様々なキャラクターの花見とそれにまつわる物語を書いています。

ぜひご期待ください。

第１回

ウマ娘短編合作

ｈｔｔｐｓ：／／ｓｙｏｓｅｔｕ．ｏｒｇ／ｎｏｖｅｌ／２６４９８８／

第２回

ウマ娘短編合作　聖蹄祭とウマ娘達

ｈｔｔｐｓ：／／ｓｙｏｓｅｔｕ．ｏｒｇ／ｎｏｖｅｌ／２６７６４２／

第３回

ウマ娘短編合作

ｈｔｔｐｓ：／／ｓｙｏｓｅｔｕ．ｏｒｇ／ｎｏｖｅｌ／２７３１２３／

第４回

ウマ旅！　～第四回ウマ娘短編合作～

https://syosetu.org/novel/27622/47/

第五回

ウマ娘短編合作　ウマ娘のバレンタイン

https://syosetu.org/novel/27965/57/

目次

第一話　あなたと私（ライス）のハッピーエンド（作・ガレット・ジーヴル）――1
第二話　桜と楯（モブウマ娘のお話）（作：スコープ）――7
第三話　スペのダイエットできない花見大作戦　あるいはスズカと花より団子（作：みやび）――30
第四話　もぐもぐ、お花見、ご一緒に（作：嵐山三太夫）――35
第五話　ナカヤマフェスタと花見酒（作：通りすがる傭兵）――43
第六話　ウマドル、春爛漫！（作：ミカヅキウサギ）――49
第七話　君と見るあのサクラ（作：暁桃源郷）――56
最終話　私が見たあの桜を、私は決して忘れない（作：ＢｕｄｄＰｉｏｎｅｅｒ）――67

第一話　あなたと私（ライス）のハッピーエンド（作：ガレット・ジーヴル）

桜が舞い散る４月。お花見をする絶好の天気が続いているものの、トレーナーである俺は花見とは全く無縁の仕事漬けの日々を過ごしている。

「お兄様、お手紙が届いてるよ。」

「ありがとう、ライス。……これ、ライスのご両親の名前だよね？」

「そうだよ……？」

この娘はライスシャワー、俺の担当ウマ娘だ。今まで様々な困難を乗り越え、二人三脚で歩んできた。最近は引退かドリームトロフィー移籍かの二択で悩んでいる。俺個人としては、本人の意思に任せるつもりではあるが、どちらの道を選んでも全力で応援するしサポートする。それがトレーナーとして、いや、一人の大人としての義務だから。

さて、いったい何の用なんだ……？

「ライスの家って、毎年お花見会をやってるの？」

「そうだよ。ここ数年はレースで忙しかったから参加してないけど。でもなんでそのことを知ってるの？」

「この手紙に、そのお花見会に参加しないかと書いてあったんだよ。ライスとしては俺に来て欲しい？」

「う、うん！ぜひ来てほしいな！」

「わかった。連絡しておくよ。」

「あ、お兄様。着替えとかは用意しておいてね。」

「わ、わかった。」

４月７日

「お兄様、ここだよ。ここがライスのお家だよ。」

「ここがライスの…。広いね…。」
「えっと、確かここら一帯の土地はみんな所有してるって聞いたことがあるよ。」
「すごいなぁ……。」
　俺はライスの実家に来ている。来ているのだが…でかい。とにかくでかい。具体的にはレース場のトラックが3個程入りそうなくらいの大きさだ。ライスは実はとんでもないお嬢様だったのか……。
「お兄様のお部屋はここだよ。」
「ありがとう……部屋？俺の？」
「そうだよ。お花見会は3日間やるから、お兄様のお部屋を用意してもらったんだ。」
「そういうことね……。」
「さ、お兄様。行こうか。」

　ライスに連れられて中庭へ行くと、ライスの両親とたくさんの親戚の方々がそろっていた。その中にはウマ娘もちらほらと見かけることができた。
「ライス、あれってもしかして……」
「うん、マルゼンお姉さまだよ。」
；；スーパーカー；；マルゼンスキーと親戚関係だったのにはひどく驚いた。まさかあの伝説とそんなつながりがあったとは……。
「ハァ～イ！ライスちゃん！元気にしてた？」
「うん！マルゼンお姉さまも元気だった？」
「あたしはいつだってチョベリグよ！で、あなたのトレーナーをちょっとばかり借りていくけど、いい？」
「う、うん。いいよ？」

「オッケ～！それじゃ！ちょっとこっちに来て！」
　そういうと、マルゼンスキーは中庭の隅の方に俺を引っ張ってきた。
「さて、ここならじっくりお話ができるわね。まずは、お礼をいわなくちゃ。ライスちゃんを担当してくれたことへのね。」
「よしてくれよ、俺はあの子の背中を押しただけさ。」
「それでもよ。あなたがあの子と繋いだ縁は、新しい風となってあの子の力となった。今のあの子には私でも負ける可能性があるわ。それくらいあなたの存在は大きいのよ。私だってそうだった。あの人とのトリッキーな出会いは、やがでうっきうきの日常になって今も私の人生をワンダフルに彩ってくれてるのよ。」
「そうか……。」
「あの子はね、あまり期待されてなかったの。もちろん、親からの愛情はあったわよ。でも、レースに関してはずっとおびえてて。トレセンに行くのだってみんな反対してたわよ。けど、あなたのおかげであの子は変われた。だから、私はあなたにとっても感謝してる。何か相談したいことがあったら可能な限り聞くわよ。」
「わかった。実はライスの進路についてなんだが、この先レースを引退するか、それともドリームトロフィーリーグに移籍するか、悩んでいるみたいなんだ。何かいい解決法はないか？」
「そうねぇ……。一つ聞きたいんだけど、あなたはあの子のことをどう思ってるの？」
「どうって……。大切な担当ウマ娘だが？」
「言い方を変えるわ。トレーナーとしてじゃない、一人の人間としてあの子のことをどう思ってるの？」
「それは……。」
「あなたの本音を聞きたいの。それがあの子のためにもなるから。」

「俺は、ライスと一緒の景色が見たい。例え見える景色が違っても、ハッピーエンドをライスと見届けたいんだ。」
「うんうん！今のあなたとってもいい顔してるわよ！鬼も笑うとはこのことね！」
「おい、誰が鬼だ。」
「知らないの？あなた表情が異様に硬くて怖いから鬼って呼ばれてるのよ。」
「知らなかった……。」
「それはともかく、あの子のところに行ってあげなさい。」
「あぁ！ありがとう！」
そして俺は、ライスの元へ向かった。これからのために。

ライスは、お兄様のことが好き。
いつからかなんて覚えてない。けど、この気持ちは紛れもない本物。入学したとき、ライスは他の子を不幸にしてしまうからって選抜レースに出走するのを拒んでた。でも、お兄様はそんなライスに向き合ってくれた。
『ライスシャワー、一緒に歩もう。君がみんなを不幸にするというのなら、そんなものひっくり返してしまおう！』
『ミホノブルボンに勝ちたい？いいじゃないか。とてもエキサイティングな挑戦だ。』

『いいかライス？君がやったことは間違いなんかじゃない。正しき行いだ。だから元気をだせ。ミホノブルボンの三冠を阻止したくらいで騒ぎ立てている彼らの方に非があるんだ。』
『春天に出るのか。わかった。阪神のターフに、青き薔薇を咲かせて来い！』
『ファイナルズ優勝おめでとう！ライスは俺の誇りだよ！』

お兄様はライスにたくさんのものをくれたんだ。だから、今度はライスがお兄様にたっくさんのものをあげるんだ。

「ライス、今いいか？」
「ふぇ!?お兄様!?ど、どうしたの？」
「大事な話があるんだ。」
「う、うん。ライスもちょうど大事なお話があるんだ。」
「そうか。ライスから先にいいぞ。」
「いいよ、お兄様のお話の方が大事だし。」
「わかった。なぁ、ライス。卒業した後、一緒に暮らさないか？」
「え、お兄様。それって……？」
「ライスと一緒に過ごしたこの日々が、俺にとってはかけがえのないものだったんだ。一緒に笑って、一緒に泣いて、一緒に努力して。だから、これからもライスと一緒にいたいんだ。」
お兄様も一緒だったんだ。ならライスも遠慮しなくていいよね。
「お兄様。ライスもね、お兄様と過ごす何気ない日々がとっても幸せだよ。だからね、お兄様。私、ライスシャワーはあなたのことが好きです。どうか私と添い遂げてください。」
「ああ。喜んで。俺の一生を君に捧げよう。」
あぁ……。うれしいはずなのに、うれしいはずなのに、なんで涙が止まらないんだろう……？お兄様のお顔がよく見えないよぉ……。

こうして、二人は結ばれた。その旅路の先はいまだ誰も知らぬ道。それを祝福するように、桜は静かにゆらりと揺れていた。その後、お花見会はいつの間にかライスの旦那お披露目会となった。トレセンを卒業した後、彼らは籍を入れて結婚式を挙げた。ライスシャワーは、大層美しい純白のウエディングドレスをまとっており、ところどころに青薔薇があるそのデザインは、祝福を体現したかのような印象を参列者に抱かせたという。

青薔薇書店

ここは、とある夫婦が経営している小さな本屋。今日もまた、一人の客が訪れる。

「いらっしゃいませ。本日は、どんなハッピーエンドをご所望で？」

第二話　桜と楯（モブウマ娘のお話）（作：スコープ）

花見。桜咲くこの季節ならば多くの人が一度は経験するだろう風習。名所なら屋台が出て子供は菓子を強請り、大人はそれに振り回されるか、或いは酒を楽しむか。

無論、それは……普段は芝を倒し、砂を踏み抜き走る彼女達、ウマ娘も例外では無い。これはある春の日、誰もが知る訳でも無い、平凡な彼女達が過ごした花見のひととき。

喧騒と言う程では無いが、人の声が広がる河川敷添いのとある花見スポット。その一角にて一つのウマ娘のグループ、三つ編みが三人とサイドテールが一人、毛色も似通った集団だった。

「っぷはぁ～ッ！」

ラムネ瓶を空にして、ビニールシートの上で仁王立ちする明るい鹿毛の三つ編みウマ娘、デュオスヴェル。そして、その隣で三色団子を座って食べているのは鹿毛をサイドテールにしたデュオタリカーと同じく鹿毛で、三つ編みにしたデュオタージェ、そして黒さが残る芦毛を三つ編みにしたデュオエキュの計四人。

活発で快活、そんな性格のウマ娘であるデュオスヴェルは「やっぱイッキが最強に美味しいよね！」と笑い、そのまま二本目の栓を開ける。当然のようにグイグイと飲み干すデュオスヴェルを見て髪色も髪型も似たデュオタージェは溜息を吐き

「スヴェル……この前、そーやって一気飲みをしてトレーナーの目の

前で盛大にゲップしたの忘れた？」
「うっ……」

細められた目から向けられた呆れに思わずデュオスヴェルの喉の動きが止まる。と言うのも彼女はつい十日程前、トレーナーの目の前で……厳密には一人だと思っていた時にトレーナーと鉢合わせ、驚くと同時に盛大に乙女の尊厳を喪ったのだ。その後、彼女はしばらくクッションに顔を埋め、全力のスパートを掛けた様な勢いで脚をバタつかせていた……そんな出来事がこの場に揃う四人の脳内に浮かび上がり……

「わーわーっ！　忘れろーっ！　全部っ！　と言うかそれを言うなら……タージェ！　あとエキュとタリカー！」
「えっ？」

ビシィッと指を向け、眉間に皺を作ったデュオスヴェルが三人に纏めて仕返しと言わんばかりに

「私は知ってるぞ！　それぞれタージェは【乙女の機密】！　エキュは【乙女の機密】！　タリカーに関しては【乙女の機密】！」
「「っわぁぁぁぁぁぁ!?」」

乙女の機密……大きな声で言うのは実に憚られる内容ではある。さて、全くもって関係のない話ではあるが、世間における肥満とは簡潔に言えば運動不足や食べ過ぎ、と行ったエネルギーの『補給と消費』の間に存在する等号不等号が『補給〉消費』になる事で起きる。端的に言えば『食べ過ぎて太った』や『だらけ過ぎて太った』と言うことであり、この『食べ過ぎて太った』と言うのは……ある意味、思春期かつ成長期の少年少女がついお腹周りを気にする原因になるだろう。

閑話休題。乙女の機密を口に出された三人……の内、二人。デュオタージェとデュオエキュは咄嗟に立ち上がり、デュオスヴェルの愛着

しているフード付きパーカーが伸び無い程度に胸倉を掴んで詰め寄り、タージェは自身の手元にあった炭酸、エキュはまだ手をつけていなかった三色団子を手にしている。

「スヴェル、すっごく炭酸が好きなんだね。耳の中にも注いであげようか……大丈夫、ほら、ちょっとパチパチするだけだからさ、ね」

「スヴェル～！　なぁーんで知ってるんですか!?　いや、それよりもほら団子あげますからお口チャックして下さいッ！」

脅迫と賄賂のダブルアタック。思わずスヴェルも苦笑いしつつ背後に一歩何とか下がろうとする。しかし逃さないと二人がかりでこれ以上何も言うなと寄られる。どんじゃかとした取っ組み合い手前になった時。ふと、三人同時にデュオタリカーが静かな事に気付く。彼女も乙女の機密を暴露されていた。彼女はのんびりとした性格ではあるが、負けず嫌いで意外と好戦的な面が無い訳でも無い。特にこう言った場面……乙女の尊厳にドロップキックかまされた時には率先してバラした犯人（デュオスヴェル）に突撃する……と、そう考えているのだ。しかし、全員がデュオタリカーの方に目を向ければそこには先程と変わらず団子を貪り食う彼女が居た。次いでに目を離した好きに空串は八本増えている。

「んふ～」

モニュ、と串をまた一つ空にしながら団子を頬一杯にして幸せそうな笑顔で食べている。

「んくっ……おいしいねぇ～」

眠気が誘われてくるぐらいに落ち着いた声音でそう三人に語る。体重……では無く乙女の尊厳的にもうこれ以上食べるのはアレだからと実はもう食べる気は無かったデュオタージェとデュオエキュを

尻目に元から自分で食べる気だった団子の山をパクパクと減らすデュオタリカー。胃袋の怪物や食堂の総大将と言った異次元的な大食い程では無いが、少ししてスッパリと団子の山は串の山に変化する。

「ん～？　みんなどうしたのぉ？」
「いや、大丈夫ですか……？　その、そんなに……」
「そう、私達は……うん、〝アレ〟が……こう、増えてるし……」

言い淀むデュオエキュ、デュオタージェ。二人としてはデュオタリカーのその地獄の減量後を案じての事だったが、デュオタリカーは全く気にした様子もなくふと気が付いた様に手をポン、と鳴らして

「あっはは～、実はこの前レースで負けた時～、トレ～ナ～が原因はねぇ、『絞り過ぎた』って言っててねぇ～、『一旦大きめに戻して絞り直す』～なんて言ってたんだぁ～」
「な、成る程ね。それなら納得だよ……」
「そ、そうなんですね。頑張って下さい……」

同士じゃなかった……！　二人は声には出さずに同時、心で叫ぶ。ある意味でとんでもない裏切りを受けた気分だった。実際裏切りも何も、そもそも仲間ですらなかったので見当違いである。

ガクリ、とデュオタージェは肩を落とし、デュオエキュはゆっくりと天を仰ぐ。尚天は桜の木のほぼ真下なので視界には桜満開桜一色であり、ふとした瞬間の風で舞う花弁は実に幻想的で良い景色だった。絶景の神は居る、でもお腹周りの神は居ない。彼女はそう思った。

「因みに～、明日はケーキバイキングに行こうかなぁって、思ってるんだぁ～」

「タリカー」
「……？　どーかしたのタージェちゃ――――」

ガシリ、と強く。ニッコリ、と微笑み。

「腹ごなしにちょーっと運動しよう、タリカー」

笑ってない笑顔でデュオタージェはデュオタリカーをビニールシートの外側へと。人の迷惑にならない、桜の隣の開けた芝生に連れ出し……

「う～ん……運動しちゃうと、すぐ痩せちゃうからぁあんまりってあいったぁぁぁぁぁっ!?」
「大丈夫、プロレスならほら、あんまり動き回らないよ。それに主に私が動くからさ、大丈夫――――!!!!!」

関節技、その中でも優しめのものを一つ二つとキメていくデュオタージェ、その様子を見ていたデュオエキュとデュオスヴェルは後にこう語った――――曰く「私だってケーキバイキング行きたかったよ！でも直ぐお腹に来るんだ！元に戻すのすっっっごく大変なんだけど!?」……そんな意思を込めた抗議の関節技の応酬だった、と――――

―

「……止め、ますか？」
「……もーちょっとだけ後で、ね？」
「ぬぅぅぅわぁぁぁぁ……たぁすぅけぇてぇ～！」
「……ケー……キィ……ッ！」

……十五分、それがデュオタリカーを襲った拘束時間だった――――

―

場は変わり、時間も巻き戻る。屋台の並ぶこの花見の喧騒、その中心地と言える場所では三人組のウマ娘が行動している。

「……ふふっ、みんな、楽しそう」

白気の多い芦毛を切り揃え、毛先をウェーブさせた彼女、デュオバックラーは、大人に紛れてチラホラと見かける子供達を見てそう小さく呟く。

他の二人も同意なようで、同じ褐色の肌を保ち、何処となく似た雰囲気を持つ二人……同じく芦毛で、色の濃い芦毛をポニーテールにしたデュオスクトゥムと、色の薄い芦毛を外側に跳ねさせたショートヘアのウマ娘、デュオシパルーがそれぞれゆったりとした雰囲気と共に歩いている。それぞれの手には既にリンゴ飴、にんじんチョコ、にんじんアイスと屋台らしい品ばかりが握られており……いや、デュオスクトゥムに関しては更に色々と抱えており、どちらかと言うと花見では無く夏祭りの様な雰囲気だった。

かなり沢山の品を抱えるデュオスクトゥム、だが決して彼女があれだこれだと買い込んだ訳では無い。実を言うと……

「……つーかさ、姉さんはなんでこうも沢山買ってくる訳？」

「え～？　だって、美味しい物、大好きでしょ？」

「いや太るわ。こんなに食ったらウマ娘じゃなくてブタ娘路線一直線だわ。アタシ出っ腹三冠取りたくないよ」

スクトゥムが〝姉さん〟と呼ぶ様に、二人は姉妹である。デュオシパルー……彼女は何かがある度に「これがあったよ、スムちゃん”ス

”クトゥ”ム”の略であり愛称」やら「これ美味しいんだって、スムちゃん」と……只管甘やかす様にあれやこれやと見せて来るのだ。
そして、それをスクトゥムが「いや……別に……」と要らなさそうにすると「そっか……ごめんね？」と申し訳なさそうにするのでスクトゥムが「……まあ、欲しいかも」と思わずボヤく……そして紹介してきた品と加えて二つか三つ、買ってくる。この流れが既に十と数回は繰り返されており、隣のデュオバックラーは微笑ましい気持ちと共に苦笑いでその様子を見ている。何にせよ、この花見に集まる屋台で一番経済を回しているのはデュオシパルーであろう事は確かである。

「因みに、その……お財布の方は大丈夫……？」

こそり、とデュオシパルーの耳元にデュオバックラーが小声で訊ねる。隣で見ていて財布の体重が絞られている様に見え、流石に心配になって来る。彼女の質問に対してデュオシパルーはクスクスと笑う。そして心配ないと言う様に

「良いのよ、趣味みたいな物だから」
「なら良い……のかなぁ……？」
「そう。こう言う時に私は使いたいの」

尚、良いとは言っているが大丈夫とは一言も言っていない。それが意味する事は……今、気にする必要は無いだろう。ただちょっとあるウマ娘が少し節約をするだけだ。

（……今度姉さんに何か奢るか）

もっとも、それを一番気にするのは本人の妹である。

そんなやり取りから寸刻し、三人組は五人組へとパーティーメン

バーが増えて居る。増えた二人は眼鏡を掛けた芦毛ボブカットのデュオプリュウェンと言うウマ娘と……迷子である。
デュオスクトゥムの手荷物が更に増えそうになった時、彼女達にとって見知った顔であるデュオプリュウェンがその隣に居るオロオロとした子供に遭遇した為、そのまま全員で子供の家族探しに協力する事になった……と言う訳である。迷子の子供に関してはしっかりと親と待ち合わせ場所を決めているらしい……のだが、肝心の子供がその場所を上手く説明できないので、その場所を一緒に探す事になった。

「ん、これ食べる？」

デュオスクトゥムが手持ちの飴を差し出すと迷子は「ありがとう！」と手に取りそのまま直ぐに舐め始める。にんじん味の飴だがこの子供はお気に召したらしい。

「欲しいもんあったらウチに言いなよ、そこの姉さんが買った奴沢山あるからさ」
「はーい！」

「それで良いよね？」とデュオスクトゥムが目線でデュオシパルーに訊ねると当然の様に頷き……寧ろそう言う優しいお姉さんムーヴをする自分の妹を見て微笑ましそうにデュオシパルーは笑っている。

「今更ですが、随分楽しんで来た様ですね？」
「いや、まあ、別に」

デュオプリュウェンが改めてその手荷物の多さに眼鏡の奥の眼を逸らす。彼女もデュオシパルーがこう言う時にやたらと妹を甘やかす手合いだと理解しているが故に何となく此処までの道中で起きた出来事が察せられた。そして、同時にデュオスクトゥム自身もそう言

う姉の行動自体は悪くは思ってない事も察する。

「ねー、おねーちゃんたちってお名前は？」

ふと連れ添ってきた子供が飴を舐めるのを中断して名前を訪ねてきた。そう言えば名前を名乗ってなかった、と四人は思い出しそれぞれ名前を子供に伝える。

「えっと……わたしは、デュオバックラーって言うの」

「で……でおばっくらー！」

おどおどとした様子ではあるが出来るだけ目線の高さを合わせ、自分の名前を伝える……が、子供にとって外国語に近い発音であるウマ娘の名前は言い難いらしく、デュオの部分に関してはもう発音し切れていない。が、それでも元気よく自分の名前を呼んでくれた子供に対して笑顔で頷く。

「私はデュオシパルー、デュオは言わないでその後だけで呼んで大丈夫よ」

「わかった、しぱるーおねーちゃん！」

「――――」

続いてデュオシパルーだが、実際にお姉ちゃんな事もあり発音し難いであろう冠名（デュオ）は切り捨ててそれ以降の名前だけで良いと子供に伝え、それに対して同じく元気に返してくれた子供にお姉ちゃんスイッチが入り掛け甘やかしそうになる。が、過去の思い出に旅立つ事で耐えた。

「ウチはスクトゥム」

「すくと……くつ……すくつむ！」

「ん、いいよそれで」

発音に悩む様子に微笑み、片手を空けて子供の頭を撫で、それに子供も笑う。

「では最後に私ですか。私はプ??????ュウェンと言います」

「ぷ……りえ……ぷ……？……」

残念な事に、流石に彼女の名前は子供にとって全体的に難しいらしく、子供の表情は　スンッとなってしまった。その様子にこの中で名前言い辛さランキング一位になってしまった彼女は思わず「やはり子供には覚えて貰えないのですか……」とガクリと肩を落とす。名前の由来自体は子供……それも男の子には人気がありそうなデュオプリュウェンではあるが、どうにも名前の発音の難しさ故に子供からは変な名前のお姉ちゃん程度の認識であるし、そもそもウマ娘の名前で変な名前のお姉ちゃん評価のウマ娘は少なくは無いので、残念な事に多くはないが確かに居る彼女のファンの中でも特に少ないのは子供である。

「えっと……メガネのおねーちゃん」

そして子供のファンが出来たとしてもこの様に子供的妥協ラインで大体は眼鏡のお姉さんになるのだ。それを見かねて助け船を出したのはお姉ちゃんスイッチが入り掛けてつい過去の出来事に想いを馳せて居たデュオシパルーである。

「ふふ、メガネのお姉ちゃんの小ちゃい頃のあだ名、プリンちゃんだったのよ～だからプリンお姉ちゃんって呼んであげて」

「ちょ、それは……!?」

もっともその船はデュオプリュウェンにとっては三途の川の渡し船、彼女にとって今では少し恥ずかしく感じるあだ名であり、その命

名理由は『プリンが凄く好きだから』だった。当時には『プリン大好きなプリンちゃん』と呼ばれ、未だ家族の間では『プリンちゃんの大好きなプリン買ってきたよ』なんて言葉と共にプリンを買って来られるのだ。それはそれとしてプリンは味わうし今でも好きなのには変わりはないのだが。

「じゃあ、プリンのおねーちゃん！」

「……！　は、はい……プリンお姉ちゃん……ですよ……！」

閑話休題。何方にせよ子供にとって分かりやすい呼び方が手に入った為にもうその呼び方で定着したのはどうしようも無いので、ぎこちないながらも笑顔でそれに応える。子供はぎこちなさの無い良い笑顔になる。デュオシパルーも良い笑顔になる。デュオプリュウェンはイイ笑顔でデュオシパルーにも笑いかけた。

「……えっと、多分この辺り……じゃ、ないかな？」

ふとデュオバックラーが足を止めて辺りを見渡す、子供の言っていた待ち合わせ場所らしい場所はこの辺りだった筈だ……と全員でそれらしい場所を探す。

「あっ、あそこー！」

子供が一つのモニュメントを指差す。そこには一人の女性が辺りを見回しており……女性も此方側に気付くとホッとした表情を見せる。どうやら母親で間違いない、と彼女達は安心し、そのまま母親の元に向かう。

「もう、離れちゃダメって言ってたのに……良かったぁ……お父さんにも連絡入れとかないと……あっ、皆さんが連れてきて下さったんですよね？　ありがとうございます……！」

深々とした礼、それに慌てて「そこまで大した事は……」と謙遜を入れるも、素直に感謝の言葉は受け取り、軽く挨拶もしてその場を後にする。子供も少し残念そうにしたが「おねーちゃんみんなありがとー！」と笑ってそれを見送る。お互いに手を振り合いながら、それぞれの花見を楽しむ為に人混みに紛れていく……

「さて、それじゃあスムちゃんのカッコいい所に免じて何か買っちゃおうかしら！」
「いや流石にもう良いって!?」

緩やかな〝食う〟花見、賑やかな〝歩く〟花見、それらとは違うもう一つの花見がその場所にあった。

『さあ、これで最高得点更新の９６．７！　流石はトレセン学園の在校生、ライブ曲はバッチリだー！』

それは〝歌う〟花見。他の花見の集団から離れた場所では栃栗毛のふんわりとしたポニーテールを持つウマ娘、デュオアスピスがマイクを片手に歌い終わった余韻に浸りつつ、司会進行役の声に耳を傾け、自分の得点に満足そうにしていた。

「ふぅ～……」

カラオケ機材がある。賑やかな祭りがある。ならば何が行われる

かって？　そんなものは決まっている……そう、カラオケ大会だ。

テーマは〝春〟に関する曲である事、それ以上の縛りは無く各々が自由に歌い、中には「春にデビューしたバンドの曲」とゴリ押しでデスメタな曲を歌う者さえ居る。そして同時にウマ娘にとっても〝春〟と言えばクラシックレースの最初の冠、或いは大阪杯に天皇賞、はたまたマイルＧＩレースや高松宮記念と言った短距離から長距離まで著名で重要なＧＩレースが存在する時期、当然……多数のウマ娘が参加し、ヒトも『ウマ娘と対等に競える機会』の一つである為に挙って参加する。普段はレースを見るだけの人間だって、時にはウマ娘と競い合いたい物なのだ……

『さあ、次の挑戦者は誰だ！　今年のカラオケステークス、誰が得点一着による栄冠を……賞品であるこの最新式家電一式を手に入れるのか！』

「「うおおおお！　家電は私／俺のもんだぁぁぁぁぁ!!!!!!」」

訂正。どうやらただ家電を求める家庭の勇士が集っている様だ。たった今デュオアスピスが出した点数に怯えも怯みもせずにマイクを取りに行く、その姿は間違いなくＧＩレースのラストを競り合うウマ娘にさえ匹敵する気迫がある。

「もう、寮生活なのに本気で点取りに行ってどうするのよアスピス」

「え～？　良いじゃない私だって欲しいのよアレ」

デュオアスピスが観客側の席に戻ると一人の長髪の芦毛ウマ娘、デュオクリペスが呆れた様に迎える。因みにデュオクリペスの点数は９１．４点であり一度は最高点を更新したその後主婦に９４．７点で更新されたので他人の事は言えない。

「何処に置くのよ、もう他人の事は言えない」

「ん～……実家に置いといて、後は一人暮らし始めた時にでも……」

演歌を歌い出した挑戦者を横目に、人差し指を頬に当てながら悩む様子を見せ、真面目に置き場所を考える。「う～ん……」と唸り、目を閉じて数秒、「あっ、そうだ」と名案が浮かんだとばかりに笑い

「トレーナーの家に置くのはどうかな？」

「卒業したら同棲でもする気なの？」

「……い、今のはナシね！」

本人なりには大真面目かつ名案……だったが、デュオクリペスの一言でそう言う意味に捉えられかねない事に恥ずかしくなり、顔を赤くしながら取り消す。妙な空気になり掛けるも、挑戦者の演歌がサビに入るのを切っ掛けにその空気は無くなる。ふと、デュオクリペスがその歌に耳を傾けて、呟く

「……卒業、か」

〝春〟は出会いと別れの季節である。誰かがそう言って、事実多くの出会いと別れを経験する。春に生まれる者が多いウマ娘にとっては、特に。そして春をテーマにした歌の中には出会いと別れを謳う物も多く、その内容を色々と思い出しては自分達に当てはめてしまう。

「……あとどれぐらい、走れるかな」

トレセン学園だけでは無く、レースの世界からの卒業……即ち引退の事を考える。嫌でも、まだ残りたいと思っても、才能か、衰えか、環境か、諦めか、節目か……或いは脚か。何かが原因で、必ず引退（そつぎょう）する。

歌い切った挑戦者が出した点数は僅かに届かず。挑戦者は悔しそ

うにしながら観客席に戻り、また別の挑戦者が現れる。その様子に二人は何となく、いつの日か……いや、いつにだって見る『最後のレースで勝てず、悔しさのままレースから去るウマ娘』を思い出す。それぞれ別のレースで、別の場所で、別のウマ娘が、同じ様に去る姿を見た事はある。いや、寧ろ見たことのないウマ娘の方が少ない筈だ。
次の挑戦者の曲は、桜が散り、何時かまた、花開く様な内容。少しだけ、寒くなった心が温まる気がした。

「……この曲、良い曲だね」
「うん……次は、勝てると良いなぁ」

空を仰ぐ様にしてデュオアスピスはそう呟く。前走の敗北……いや、前走だけじゃ無い。勝ち星よりずっと負け星の方が多いから、寧ろいつもの敗北……そう言うべきだろう。

「アスピスならね、きったまだまだ行けるの」

デュオクリペスが目を閉じて、隣に座る彼女の肩に顔を乗せる。その言葉の外側には「私と違って」と言う少しの自虐と、期待が入っている。
……彼女、デュオクリペスはもう勝ちを望めない。それが彼女自身とトレーナーの見解であり、まだ公表して居ないが、誰もが来年の春の前には引退するだろう……そう確信している。出られるレースだって少なくなってきたのだから、潮時なんだと納得している。今挑戦者が歌う曲のサビ、再起を歌う内容とは真逆の凪いだ諦めの感情。

「……」

反して、デュオアスピスはそれに悔しそうに唇を噛む。彼女にとって、デュオクリペスは間違い無くライバル〝だった〟。だがレースを走れば走る程残酷な差が生まれ、少しすれば同じレースに出る事自体

が無くなっていく。それは出るレースを分けると言う意味では無い。単純な実力差で同じレースに出る選択肢が取れなくなった……それだけの事であり、それ故にどうしようも無いと思ってしまった。

「アスピス……」

「……」

「私、多分次が……」

聞きたく無い、そう思った。だけど……ライバルとして、親友として、聞かないといけない。

「ラストランなんだ」

サビを歌い終え、今までより力強く桜の花が咲き誇る――――そんな歌の終わりに紛れて彼女の声がデュオアスピスの耳に届いた。

震えている。何より、諦めているけど、隠せない程に……悔しい。それが伝わる痛々しい声だった。

「……そう、なんだね」

やっぱり、とは付けたくなかった。それは彼女のある種の意地であり、ささやかな反抗心の一つである。親友がターフから去る、それを当然の物と受け入れたくない。それに対してのそんな子供染みた反抗。意味なんて無いが、それでも……

挑戦者が出した点数は９８．９点……更新された点数を見て、観客は大きく盛り上がる。司会はこれに敵う点数を出せる方は果たして現れるのか!?　と、煽る様にマイクを観客に向ける。『脅威の９８．９点、一位になるには９９点以上必要です！』と。再挑戦も大歓迎です、と。

「……それでもさ」

「……アスピス？」

それでも、と。司会がそれでも勝てる、勝ちたい、歌いたいと思う方はどうぞ前へ、と。

「次は――――勝とう」

次の挑戦者、それを求める司会に対して勢い良く立ち上がり、デュオアスピスは前に出る。

「それでも私は――――」

無茶でも、無謀でも、無理でも。勝てないとしても、何が何でも。何度もマイクを持って、何度も声を枯らして、何度も負け続けて。

だとしても……

それでも私は、まだ歌（はしり）いたいんです。

河川敷、その傍には明るく色づいた桜並木。咲き誇るその桜の花弁は時折風に誘われ、揺れながら地面に落ち、時に川の流れに乗り下流へと攫われて行く。

晴天の青と疎に散らされた桜色に一つ、芦毛の髪と穏やかな瞳が反射した。

「やっぱり……川沿いは良い風が吹きますね」

芦毛を揺らす風に目を細める彼女、チーム〈ファースト〉の一員で

あるデュオペルテは花見に乗じた屋台すら無い場所に足を運び、桜の根元に腰掛けた彼女は遠くを見つめる様にして呟く。桜の？間から覗く陽光を受けつつ、膝を抱え、耳を垂らす彼女。その彼女に射していた明かりを一人の影が遮る。

「ペルテってば、まーだ引き摺ってんの？」

「ジャヌイヤ……」

未だに黒さが残る芦毛を持ち、同じくチーム〈ファースト〉に所属するウマ娘、デュオジャヌイヤがデュオペルテの横に立ち、溜息を吐きつつ乱雑な勢いと共にペルテの横に腰を下ろす。気遣いが無いと言うわけでは無く、敢えてそうしている……それがデュオペルテには分かった。

まだ、引き摺っている……それは、アオハル杯決勝戦の事だった。チーム〈ファースト〉は、チーム〈キャロッツ〉に対して……敗北した。完膚なきまでに……と、言うわけでは無い。二勝三敗にて、敗北したのだ。

「負けたの、責任感じてる？」

「……うん、やっぱり、ね」

二勝三敗……三敗内の一つは写真判定にまでもつれ込んだ大接戦の敗北。そして写真判定にまでもつれ込んだレース……それは、短距離部門。即ち……

「やっぱり、私のせいって思っちゃうな」

「……ん、聞くよ」

彼女、デュオペルテは……キャロッツにハナ差にも満たない僅かな差で、二着となった。

……確かに、自分達が尊敬する理事長代理の想定以上の結果を出し

たと言える。けれど、それ以上に……負けたのが、悔しくて堪らない。もっと、差を作れていれば……もっと、上手くコース取りを……もっと良いスタートダッシュをと、悩む事なんて増えて行く。だが、たらればやあの時こうしてたら、何て言うのは意味がないと真っ先に理事長代理に言われた事であり、デュオペルテ自身も思っている事だ。なら、何を引き摺って、何をそこまで責任に思うのか……それは……

「……私、負けた事、ちょっとだね……良かったって……思っちゃったんだ」

敗北の悔しさと同時に……安心してしまった。それが彼女の抱える物。

「負けたから、チームは解散にならない。きっと、もっとみんなで……一緒に走れるって、そんな風に」

それから一言、二言と増えて行き、どんどん溢れ出る様に懺悔に似たような言葉が彼女の口から溢れてくる。

実際に今もチーム〈ファースト〉は存続している、だからこその後ろめたさ。もしかしたら負けたらチームが続くかもしれない……そんな意識があったから自分は負けたんじゃないか。と、大きくまとめてしまえばそんな内容。それに対して、デュオジャヌイヤは……

「……グゥ」

「っ、ええ……」

寝てた。流石にこれにはデュオペルテも陰鬱とした表情が吹き飛び苦笑いになる。緊張感（シリアス）はどうやら盛大に掛かってスタミナ切れで垂れた様だ。デュオペルテは思わず後方のバ群に沈んでいくシリアスを幻視した。

「ちょ、ちょとぉ……」
「んぇ」
「もう、起きてよジャヌイヤちゃん……聞くって言ったのジャヌイヤちゃんじん……！」

揺すられて気の抜けた声と共に目を開けるデュオジャヌイヤ、一つ伸びをした後、耳の裏をポリポリと掻きつつ溜息。

「……取り敢えずまあ、何と無く聞いた範囲でだけどさ、良いんじゃない、別に？」
「ええ!?　ぜ、絶対良くないって……」
「いやさ、なーんて言うのかなぁこれ」

まさか特に問題ない、と言われるとは思っていなかったデュオペルテは狼狽え、思わず手を右へ左へと動かす。そんな彼女を尻目にうんうんと的確な言葉を脳内に存在する最高（自称）の語彙辞典彼女を良く知る者曰く総二十五頁から引き摺り出そうとする。

「……こう、アレなんだよね。あーいうさー！」
「お、落ち着いてジャヌイヤちゃん……!?」
「ぬぉあー！　よーし、もう良いイチから話す！」

グワッと勢い良く立ち上がり、指を目の前に突き出す。落ち着きのない様子に思わず肩を跳ねさせるデュオペルテに構わず、デュオジャヌイヤはこの意見に何の欠点もない、と自信満々な表情で口を開く。

「先ず、ペルテは案外バカだから「え!?」、レース中にそんなあーだこーだ考えてられる余裕なんて無い！　よって、あのレースは間違い無く全力だった！　んで負けた！」
「いや最後は言わなくても良いよね!?」

デュオジャヌイヤ先日のテスト７８点からの唐突な罵倒に思わず色々と言いたくなるデュオペルテ先日のテスト９２点。更に続けて

「それに、ペルテは優しいからさ。負けたらみんなが悲しむって分かってるから絶対全力だった」

「……そう、かな」

「そうなんだって、って言うか私だって『負けたー！』って時にこれでファーストが続くなぁって思ってたけどさ、それってやっぱり『ファーストのみんなとトレーナーが好きだから』って事じゃん」

「……そっか、うん。そうだね、私もみんなの事、好きだから……そう言う事なんだね」

彼女の歯に衣着せない、そんな言葉だからかその言葉はストンと胸の中に落ちてきた。胸に手を当て、その言葉を噛み締める様に頷く。

最後に、「まあ、それでも不安なら……トレーナーと話し合ってみたら？　私達ともっと向き合うって言ってたじゃん」とデュオジャヌイヤは付け加えて……

「……うぁ」

遂に彼女の脳がショートした。どうやら脳内辞書の頁が足りなくなったらしい。再びデュオペルテの真横に音を立てて座り、頭を抱えて悶え始める。

「なんか……なんか自分の柄じゃない事やった気がする……っ！すっごい恥ずかしくなってきたぁ……！」

「締まらないなぁ、もう」

友人の為。とは言え慣れない役回りを自覚して一気に顔を赤くして脚をバタつかせて悶えるデュオジャヌイヤを笑って眺める彼女は「さて」と今度は彼女が立ち上がり

「お腹、空いちゃったから何か買ってくるねジャヌイヤちゃん」

「わ〝か〝っ〝た〝ぁ〝……」

「何かリクエストはある？」

「……かき氷、練乳いちご……」

「じゃあ、行ってくるね」

羞恥に悶えながらもしっかりと自分の欲しい物は言う辺り、欲望には正直である。そんな自分の友人のオーダーを聞き届けた彼女はゆっくりと屋台のある場所へ向かい始める。

「……ありがとう、ジャヌイヤちゃん」

ぽつり、と後ろのデュオジャヌイヤに言葉を置いて、そこからは少しだけ駆け足になり直ぐに人混みに紛れて行く。

一つ、深呼吸を挟み一度羞恥から抜け出したデュオジャヌイヤが彼女が紛れた人混みの方を見つめ

「……どういたしまして」

同じぐらいの声量で呟く。彼女なりのやり方ではあるが、デュオペルテの事を心配して居たが故に慣れない事をした。

「……次は勝つ！」

空を、頭上の桜を見上げて誓う。チーム〈ファースト〉の中でマイル戦でのあの敗北……それを思い出し、悔しさと同時に感じる熱。自分がトレーナーの担当で恥ずかしくない様な勝利をする為に……一

先ず、今日だけは美味しい物を食べて、桜を眺めてゆっくりと休息を取ろうと、デュオジャヌイヤはデュオペルテが戻ってくるまでの間、昼寝を敢行する為に瞼を閉じた。

第三話　スペのダイエットできない花見大作戦　あるいはスズカと花より団子（作・みやび）

桜の季節といえば、一般的にはお花見かもしれないが、トレセン学園のウマ娘達は、あまりお花見という習慣はない。

トゥインクルシリーズを走っているウマ娘達にとって、桜が咲く時期はシーズン真っ最中。

練習にレースにと非常に忙しい時期だ。

さらに、トレセン学園は、春にファン大感謝祭も行われる。

トゥインクルシリーズを走っていないウマ娘達は、ファン大感謝祭の準備に追われているのだ。

だから、花見なんて楽しんでいる余裕があるウマ娘なんてそう多くはない。

そう多くはないはずであった。

「スペちゃん？」

「食べ過ぎちゃって……」

花より団子をキメたスペシャルウィークは見事にまんまると太っていた。

きっかけは、スペの実家から送られてきた食材だった。

いつもだと人参ばかりだったが、今回は大量の乳製品が送られてきたのだ。

牛乳にバターやクリームといった加工品まで、酪農業をやっているスペの実家から送られてきた渾身の製品たちは、確かに非常においしかった。

だが、そのカロリーがやばかった。大体お菓子に加工されたから、本当にカロリーがうなぎのぼりである。

しかもどれも足が早い。

パクパクしたマックイーンはまるまるックイーンにジョブチェン

ジしたしスピカメンバーは大なり小なり被害を受けていた。
無事だったのは走りまくっていたスズカと、案外節制ができるテイオーぐらいであった。
スペも真ん丸になっていた。
スペが良く食べることは必ずしも欠点ではない。
体を作るためには食べるのが必須だ。
彼女自身、怪我をしないのは、そういったよく食べることも根拠の一つだろう。
だが、スペは想定体重を超えると急に遅くなるタイプのウマ娘である。
レースまでに絞り切らなければ、次のレースは絶望的である。
スペシャルウィークのダイエットに、スズカは付き合うことにした。

「ウソでしょ……」
「えへへ……」
三日後、スペの体重は増えていた。
三日間、桜の下を二人で走っていた。
花見の時期である。
桜が綺麗な場所で走った方が、気分がいいだろうとスズカが判断して決めたコースだった。
花見の時期となれば、トレセン学園周辺でも桜のスポットは多い。
東京競馬場の隣にある大國魂神社なり、近くの多摩川沿いなり、ちょっと走った先にある多磨霊園なり、東京競馬場自体も桜がきれいだ。
他にも小さいところまで合わせれば大小さまざまな花見スポットがある。
その景色は確かにとても気持ちいいものだった。
だが、それだけで済まなかった。
そこかしこで花見をする人がいたのだ。
スズカ一人だけなら、特に気にすることはない、無関係の人たち

だっただろう。
声をかけられても、会釈程度で流していたはずだ。
だが、人懐っこい性格のスペは違った。
すぐにファンという人たちにつかまったスペは、その人たちにいろいろもらってしまった。
スズカにも止められなかった。
もらうものといえば、食べ物ばかりであった。
唐揚げといった揚げ物。
おにぎりのような炭水化物。
団子などの甘いモノ。
スナック菓子などの軽食もあった。
もらったものを笑顔で受け取り、その場で食べていくスペ。
そんなことをしていれば、当然体重はうなぎのぼり。
「走って消費するから大丈夫です!!」
と豪語していたが、明らかに食べ過ぎである。
どれだけ走っても消費しきれるレベルではなかった。
ついでにスズカも太った。
さすがにそこかしこでもらったものを断れずに食べたのがまずかった。
鏡で自身の姿を見ると全体的に肉がついている気がする。
スズカは隣のスペを見る。
純朴であまり女性らしさを出さないスペだが、体格はかなり女性らしく出るところは出ている。
トレーニングをしているせいか、意外とスタイルは崩れていない。
ただ、トモから尻にかけてがむっちりと女性らしくなっていたし、胸もかなり大きくなっていた。
端的に言ってナイスバディだ。
一方スズカはどこも出っ張らずになんとなく肉がついていた。
スズカは悲しくなった。
そうしてスズカはスペを見捨てた。

このまま続けていてもスペは痩せない。
もうトレーナーさんに任せることにした。
後、スタイルの差も少し根に持っていた。
スズカは走るのが大好きであるがそれだけで生きているわけではない。
多少おしゃれにも気を使っているのだ。
食べて、女性らしく丸くなるスペと、なんとなくぼんやり太る自分の差が悲しかったのだ。
痩せて、前のスマートな体型に戻るため、スズカは走り続けた。
個人練習を1週間もすれば、スズカは再度元の体型に戻った。
スズカはもともと体型維持に苦戦している方ではないのだ。
トレーナーさんからももう少し食べた方がいいといわれるぐらいであり、普段の生活をしているだけで元の体型に戻った。
そうして1週間ぶりにチームルームに行くと、そこは惨状だった。
スペはスペまるウィークに進化し、さらに太っていた。
メジロマックイーンも、メジロまるックイーンになっており、真ん丸だった。
ダイワスカーレットとウオッカも、そこまでひどくはないが明らかに太っている。
ゴールドシップは逆にがりがりに痩せていた。何があったのだろうか。
そしてトウカイテイオーはいなかった。きっとこの惨状から逃げて、生徒会室あたりにいるのだろう。
要領がいいことである。
ゴールドシップと目が合った。
救いを求める顔をスズカに向けていた。
基本傍若無人で豪快な彼女にいったい何があったのか。スズカにはわからなかった。
わからなかったが
「ゴールドシップ、頑張ってね」
スズカは笑顔でチームルームの扉を閉めたのであった。

ゴールドシップの絶望の表情だけが印象的であった。

桜の花びらが散るころには、チームは今まで通りに戻っていた。

まるまるになっていた二人が、いつの間にか元通りになるのは不思議である。

ただ、スペのスタイルが良くなっているのに気づいたスズカは、少しだけ悔しい気持ちになるのであった。

なお、ゴールドシップはなぜか丸々と太っていたが、スズカは気にしないことにした。

第四話　もぐもぐ、お花見、ご一緒に（作：嵐山三太夫）

春、といえば桜。

盛りも散り際も愛でられる、日本人にとってすっかり馴染み深いこの花は日本の春を代表するものの一つだ。

その美しさを楽しみ歌に詠んで愛するか、はたまたその艶姿を肴に飲み食いするのか、いずれにしても愛される花であるのは違いない。

さて、桜のような派手さこそなくとも老若男女、広く多くの人に愛され、慕われる担当ウマ娘から今年の春はある「おねだり」をされていた。

それは新年度を越えて少し経った頃。

「ついたーっ！おー、すごいですよトレーナーさん！桜もお花も満開！」

「おーい、はしゃぐのもいいけど前見て前。君の腕には今何があるのかな？」

「おとと、そでした。えへへー、お母さんたちがすごく張り切って腕を振るってくれましたので。

ほっぺた落ちちゃうかもしれないですから気を付けてくださいねぇ」

「君が作ったのもあるんだろう？ご両親からものすごく気合い入れてたって聞いたよ」

「はわぁ!?どどどどうしてそれを……その、それはその、おいしいの食べてもらいたいですし、その、あのあのあうぅぅぅぅ」

「落ち着いて落ち着いて」

もう彼女との関係も長くなるのだが、あうあうと顔を真っ赤にしながら慌てふためく彼女の初々しさに抱きしめたくなる衝動を必死にこらえながら、花見に良い場所を探す。

片耳にお洒落な帽子を乗っけた、純情定食屋小町の努力家ウマ娘。そして、この花見の提案者。

彼女の名を、マチカネタンホイザという。
もぐもぐ、お花見、ご一緒に　著：嵐山三太夫
事の発端は、山あり谷ありハプニングと悲喜交々の最初の3年間を共に乗り越え、更に2年を経た後のこと。
ライバルだったライスシャワー、ミホノブルボンやナイスネイチャ達のドリームシリーズ移籍と共に彼女も移籍を決め、今後の予定や進路を確認している時だった。
「そういえばトレーナーさん。ここ最近、あんまりお仕事以外でお出かけできてないですよね？」
「ん……確かにそうだな。今やすっかり君もスターの一人だからね、ここ最近取材も続いてたし」
「でへへ～……気づいたらすっかり私もあちこちで声かけられるようになっちゃいましたからねぇ。嬉しいような、ちょっとだけ大変なような～……」
今や彼女も街を歩けばサインを求められ、トレセン学園近所の商店街では買い物の時におまけされるほどの顔なじみ。
地元ではすっかりご当地の英雄扱いで、たまに学校などから講演依頼まで来るように。
そして彼女も求められれば気前よく応じてしまうために、必然的にスケジュールは埋まりがちであった。
「それで、今年からドリームシリーズですから。今までのレースの分少しだけ時間が取れますよね？」
「そうだね。ドロワやファン感謝祭といったのはあるけどスケジュールは調整できると思う。
何か予定があるのかい？」
「えっとですな。……今年のお花見のことについてなんですけどね」
はて、と首をひねる。
今までは友人――ナイスネイチャやツインターボ、イクノディクタスらとそのトレーナー達を筆頭とした面々と花見をしていたので、確かに二人きりでの花見は無かった。
ただ、これについてはツインターボから「皆でお花見したいぞ!!」と

いう強い要望があってのことではあったのだが。
「今年、ネイチャが自分のところのトレーナーさんとお花見に行くんですよ。……その、二人で」
「それは……つまり、そういうことか？」
「はい、もう実質夫婦ですけどねあの二人。まあ、そんなわけで私たちもネイチャに協力する形でそれぞれにお花見しようってことになりまして。イクノはマックイーンさんとメジロ家のお花見に、ターボはテイオー達と、ライスさんはフラワーちゃんやブルボンさん達と行くみたいです」
「……あれ？タンホイザはどうするんだ？フクキタルと行くのか？」
「……その、それ、なんですけどね？」
赤くなった顔をうつむき加減にしながらもじもじと指をさまよわせ、へにゃりと耳を倒して。
「……こ、今年は二人で、お花見デートなんて。その、ドウデショウカ!?」
最後の方は目をぐるぐると回しながらも、はっきりと。
『お花見デート』へのお誘いをマチカネタンホイザは見事に遂行した。
「……い、言った、言えた、言っちゃった……」
……そのままへにょりと垂れた耳を押さえながら真っ赤になった顔を隠すようにへたり込む、と。
「そうだな、そうするか」「え〝っ」
あっさりと返された返事に、む〝い〝!?と擬音が付きそうなほどの勢いで反応するタンホイザ。
「いや、どうせなら静かに花見ができるところがいいと思ってさ。ほら、普段だとファンに囲まれたり
してるし、大人数で集まらないならちょっとお忍びで行くのがいいかと思って」
「……あ、あぁ、なるほどぉ～……あっさりすぎてびっくりしちゃった」
驚きからほっと息を吐いて、どこか少し残念そうなようで安心したような表情になるタンホイザ。

その間に一度跳ね上がった尻尾はへにゃりと元気を無くしていたが、取りあえずトレーナーはその事を気にしないことにした。
女性――それもティーンエイジャーの年代だ――に対しては細かいことを聞かない方が良いこともあると、多感な時期のウマ娘達と交流してきた彼は経験則から理解していた。
「……それじゃあ、どの辺で行きます？あ、でも桜の時期は結構忙しいですねぇ……ムムムム」
持ち歩いているスケジュール帳を取り出し取材等の予定を確認すると、検討を始めたタンホイザ。
しかし、トレーナーはおもむろに壁のカレンダーへ向かうとそれをめくった。
「タンホイザ。一つ提案なんだが――桜と他の花が同時に楽しめるかもしれないとしたら、どうする？」
「……ほえ？」
こてん、とはてなマークを浮かべてタンホイザは首を傾げた。
そうして5月――新入生も迎え学園のイベントが一通り落ち着いた後、2人は山間の町へと来ていた。
時期的にヤマザクラや八重桜がまだ咲いており、他の花も多く見られるこの時期は天気さえ良ければ絶好の花見の時期である。
「おおー、桜もキレイだけど他の花もキレイですね！これはツツジでー、これはシャクナゲでしたっけ？」
「そうそう、そっちの地面から生えてるのはシャガだな。ほら、藤の花もあるぞ」
「ほえー、いっぱいありますねぇ。あ！この花の真ん中が膨れててぽわぽわしてるのもしかして！」
「……良い目してるなー、お察しの通り野いちごだよ」
「やったー！うーん、でも食べられるようになるのはもっと後になりそうですねぇ」
「八重桜ってこの時期まで咲いてるんですね、今が満開って感じ」
「その年にもよるけどソメイヨシノより少し遅くに咲くからね。こういう山間なら今ぐらいがちょうど時期なんだ。ちょっと遅い時期だ

けど、こういうのも悪くないだろう？」
「うんうん、これだけいい景色でお花見できるのはいいですなー。なのにいるのは私たちだけ！わっははは～い♪」
お花見、お花見、ホホイホ～イと即興の歌を口ずさみながら重箱やトートバッグを持つタンホイザ。
ウマ娘らしく何重にもなっている重箱には、彼女とご両親が協力して用意した料理がぎっしり詰まっているはずだ。
「おぉ、中身が気になりますか？開けてからのお楽しみですけど、トレーナーさんが好きなものもた～くさんありますよぉ」
「ほほう、それは楽しみだ。……すっかりタンホイザに好みを知られちゃったな」
「えっへへ～、もう5年のお付き合いですから。実家にも何度も来てもらいましたし、試作メニューの試食だってしてもらいましたし？」
「嫁入り修行とか言われてなかったか、あれ」
「いやあ、その節はご協力ありがとうございました。あれ私の跡継ぎ試験みたいなものでして。お父さんとお母さんを納得させられる味とクオリティで創作料理って、今考えても結構ご無体だった気がしますけど……トレーナーのおかげで無事完成しましたし！」
――彼女と出会い、担当になることが決まって、トゥインクルシリーズに挑戦を決めた日から5年。
ドリームシリーズまで辿り着いたこの瞬間まであっという間だったようにも、とても長かったようにも思えるのはいくつもの出来事を、自分たちに出来る一つ一つを幾重にも積み重ねたからなのだろう。
（――いやはは～、やっぱりダメですね。こうして隣にいてくれるだけでなんだか、幸せに感じちゃうんですよねぇ……）
「ん、どうかしたか？」
「い～えっ、なんでもないですよう！」
隣のトレーナーを見上げながら、マチカネタンホイザは花のように笑った。
それから歩くこと少し、2人は桜とツツジとシャクナゲが寄り集ま

るようにして咲く場所を見つけた。
「よし、あの辺にシートを広げようか」
「お、良いですねぇ。むっふふーん、お楽しみ、お弁当の時間ですぞー」
トレーナーが持参したシートを広げ、四隅に適当な石や靴を載せて風で飛ばないようにするとタンホイザが
いそいそとトートバッグからタッパーと取り皿を取り出し、重箱を開けて広げる。
「この段がおにぎりで～、これとこの段がお肉の段で～、ここはお野菜の煮物や胡麻和え白和え、プチトマトに温野菜！デザートにフルーツも持ってきてるから絶対お腹一杯にしちゃいますよぉ」
「おお……すごく頑張ったんだな、感謝して食べないと」
「えへへへ、どもども。お母さんたちも感想聞きたがってたので是非ともたくさん食べてくださいねぇ。ささ、どーぞどーぞ」
「ありがとう。じゃあ、お返しにジュースをどうぞ」
「やや、これはどうもご丁寧に」
紙コップにジュースを注ぎ、取り皿にタンホイザが料理を取り分けて。
「それでは、かんぱーいっ！」
「おっとシンプル」
「……その、お腹空いちゃったので。てへ」
「やっぱりハンバーグもエビフライも美味しいなぁ……」
「その辺りのおかずはお父さん達の監修ですよぉ。……まだまだ味は追い付けないんですよねぇ、どこにコツがあるんだろう」
「お、煮物は出汁が良く利いてるな。かぼちゃもほどよい甘さだし、この春巻もうまい」
「そ、そですか……えへへへぇ、良かったぁ……」
「なるほど、この辺はタンホイザが作ったんだな」
「へ？あ！……バレちゃいました！」
「ふき味噌うまいんだけど……やっぱり酒が欲しくなるな」
「あ、やっぱりそうですか？ウチではお父さん達が花見する時に欠かせないんですよ～、お酒のおつまみでにんじんスティックつ摘まむの

に良いって言ってて」
「まあ今日はおあずけ、だな」
「ふっふっふ、その分たっくさん料理はございますぞ～、ささこれもこれも！」
　のんびりと飲み食いしながら、風に流れる花の枝を時に見つめ、思い出を語り、気づけばあれだけあった料理はすっかり無くなっていた。
「美味しかった……ごちそうさま」
「えへへ、お粗末様でしたっ。やー、食べきっちゃいましたねえ」
「おかげさまでお腹一杯だよ」
「むっふふー、作った側としては嬉しい限りですねぇ」
　重箱を片付け、魔法瓶に詰めてきていたほうじ茶で一息。
　温かさに2人の顔がほわりと弛む。
「……なんだかこうしてるとあれだな、年を食った気になるよ」
「えぇ～、トレーナーさんまだ若いじゃないですか、おじいちゃんになるにはちょっと早すぎますよぉ？」
「君らイマドキの子から見たらもうおじいちゃんだろうに」
「そんなことないですよぅ、まだまだお若いですよ～」
「ありがとう。……でも、君とトゥインクルシリーズに挑んでもう5年、なんだよな」
「ですねぇ。……気づいたら私もドリームシリーズ移籍だなんて。これはやっぱり、トレーナーさんのおかげですよね」
「そりゃ違うさ、君の努力があったからだよ」
「ええ、トレーナーさんの指導のおかげですよ！私だけじゃここまで来れてないですよ」
「いーや、タンホイザは凄い子なんだからきっと来れてたさ」
「いやいやトレーナーさんが……あれ、これもしかしてずっと続きますね？」
　お互いに見つめあって、思わず吹き出す。
「くくくく、似た者同士だなぁ俺達！」
「くっふふふ、もう～！はーおっかしい……」

ひとしきり笑って、タンホイザは身体をトレーナーの近くへ寄せる。
「……トレーナーさん。今日、２人で来られて良かったです」
「そうか、楽しんでくれて良かった。リフレッシュ出来たか？」
「それはもう。……来年も、お花見行きましょうね」
「その時は２人じゃないかもしれないけどな。またツインターボ辺りが人を集めるだろ」
「そうですねぇ、２人っきりではいられないかもですね。それはそれで楽しいから良いんですけど」
「まぁでも……俺は来年も再来年も、君と花見が出来たら嬉しいよ」
「……！」
その言葉に思わずタンホイザはトレーナーの顔を見上げる。
トレーナーの視線は花を見つめているようで、しかし少し赤に染まった耳が先程の言葉が幻聴でないことを示していた。
「うん……うんっ！絶対行きましょう！私、またお弁当作りますから！
来年も、再来年も、この先も！一緒にお花見しましょう、トレーナー！」
「おわっと、勢いつけたら危ないって」
「えへへー、そこは頑張って受け止めて下さいっ」
まだ少し冷たい空気の残る春の空に、約束１つ。
寄り添い１つになった影は夕陽が傾くまで、しばらくそのままだった。

第五話　ナカヤマフェスタと花見酒（作：通りすがる傭兵）

「柳に小野道風、柳に燕、短冊とカス、桐に鳳凰、カスが3枚……ふぅ、全部揃ってたか」
「トレーナー、なにしてんだ？」
「ちょいと落とし物を集めててな、枚数が揃ってるか確認したかったんだ」
　たまたま通りがかった普段使われていない空き教室の扉が空いていたので覗き込むと、無造作に机の上にカードの束が広げられていた。おおかた不良ウマ娘が遊んでそのままだったんだろうが元来の性格かなんとなく放置せずにはいられなくて整理してしまったところだ。
「それトランプか？」
「いや花札だよ」
「花札か」
「知らない？　日本の古いカードゲームさ」
「……　聞いたことないな」
　トランプゲームや賭け事に精通したフェスタが花札を知らないと言って少し驚いた。日本古来の賭け事といえば多くの人がこれを思い浮かべるだろうし、数年前のアニメ映画ではこれを使って敵と対決するシーンがあったはずだ。って、フェスタがアニメに興味もあるはずもないか。
　少し考え事をしている時間にもうフェスタがせっかく揃えた山を無造作に崩してカードを見比べ始めニヤリと口角を吊り上げている。
「その言い振りじゃあ遊び方は知ってるんだろ、折角だし勝負やろうぜ」
「いいけど、流石にルール説明くらいは聞いてくれるよね」
「当たり前だ」
「わかった。今回は2人だし『こいこい』で遊ぼう。このゲームの目的

と勝利条件なんだけど――」
「と、こんな感じだな」
「なるほど。で、何を賭ける？」
「何を賭けるか、か」
「何か賭けるものがなくちゃ面白くねえ、そうだろう？」
　いつものように賭けを提案するナカヤマフェスタに対し少しだけ考え込む。初心者で不利がつくフェストのために軽いものがいいだろうが、どうしたものか。そうしていると開いた窓から何かが舞い込んでくる。フェスタが拾い上げたピンク色のそれは春の風物詩と呼べる桜の花びらだ。
「ん、桜か」
「桜……お花見か。そうだ。負けた方が花見の準備をするのはどうだ？　日程決めとか、場所決めとか」
「花見か、悪くねえな」
「じゃあそれで行くか、まずは親決めからだね」
「おう」
　何かが彼女を駆り立てるのか本人は常日頃から「ヒリつく勝負が好きなんだ」と言っていた。ウマ娘は元来勝負好きな性格ではあるがウマ娘が競走を好むように肉体的な勝負を好むことが多く、賭け事に使われる頭を使ったゲームを好きだというのは珍しい。
　山札から配られた2枚の札の片方をフェスタが捲ると菊（9月）のイラストが描かれたカス、残った片方を捲れば、桜（3月）のカス。
「アンタが親だな」
　慣れた手つきで捲った札を山札に混ぜ、手札と場札を配ってくれたフェスタ。トランプをよく遊んでいるからかフェスタのカード捌きは惚れ惚れするくらいに滑らかだ。
　配られた手札を8枚場札8枚を見比べながら戦略を練る。
　こいこいの戦略は大雑把にいえば「役を作ること」「役を作らせないこと」の2点に尽きる。同じ絵柄の札を重ねて取り、その中で役を作るのがこいこいの基本的なルールであり、要するに「手札が若干透けるポーカー」のようなものだ。

手役を確定出来る札をある程度手札に残しつつ、相手の狙いそうな役に必要なカードを狙い打つ……　シンプルゆえに奥深く、運任せゆえに一発逆転があり得るゲーム。
「じゃあ、コイツからだな」
「へぇ」
場札に手札から1枚重ねて、山札の1枚目を捲ると合う札がたまたまあったから手元に置いた。フェスタも同じように手札から場札に1枚重ね、山札の上の札を捲る。
レース前のように目を細め、合わなかった絵柄の札を場に置くフェスタ。どんな細かなことも見逃さず、全てを勝利に繋げようとする勝負師の目――俺は彼女のそんな目に魅かれた。
「……　じゃあ、コイツ」
「なるほど、私はこうしようか」
「うーん、わからん」
「あんたがそう言う時は大抵強え札持ってるくせに」
「バレたか」
数巡後、手堅く役を揃えてあがったのは俺の方だった。
「青短、あがりで」
「次だ」
悔しがるでもなく淡々と札を集めて切り直すフェスタ、だが若干の手つきの荒さが彼女が悔しがってくれることを教えてくれる。
そして次のゲーム、上がり続ける限り親は変わらないからまた先行は俺からだ、配られた手札は……
（相変わらず点数は望めそうにないなぁ）
先ゲームと同じ、速いが軽い点数しか望めなさそうだ。予想通りにゲームは進行し、数順回して手札を何枚か残した上でまたあがったのは俺だった。
「三光、あがりだ」
「……　次」
さらに次のゲームはお互いに決め手を欠きあがりなしでゲームを終えるが、

「……　なるほどな」
「？」
　意味ありげにフェスタが呟いていたのに首を傾げつつ次のゲームへ。使ったカードを切り混ぜながらふといつ終わるかを聞いた。
「ところで終わりはどうするよ」
「次でいいんじゃねえか？　こんなもんだろ」
「珍しいな、勝つまでやると思ってたんだが」
「勝算があるんだ、次で終わらせてやるよ」
　次で終わらせるの宣言通り、親が変わって先手を得た彼女のゲームは支配的だった。息をするように俺の札を的確に腐らせつつ、
「猪鹿蝶、こいこい」
「タン、こいこい」
「四光、こいこい」
「カスであがり。何点になる？」
「俺の負けだな」
「相変わらず勝負っ気のない奴だな……　もう1ゲームだ」
「次で終わらせるんじゃなかったのか？」
「勝負を投げてる奴に勝っても面白くねえよ、本気で来い」
「……　なんだかな」
「ほらよ」
　カジノディーラーのようにカードを手元に飛ばすように配り始めたフェスタを見て、苦笑いしながら配られた手札を握った。本気でやれと言われればこっちも考えがないわけじゃない。長く二人三脚で歩いてきたんだ、あまり推奨されないが身内読くらいは覚えてしまう。フェスタの細かい癖……　耳と目線の動きで握っている手札の価値はある程度は透けて見える。
　数枚に対して反応すると言うことは高い点数につながるタネ札は何枚か握っている。なら繋がる絵柄を積極的に潰す……　とはいえこっちの手札もあがり目は薄い。五光あたりの高い手が欲しいが、フェスタの様子を見る限り素材はあっちの手の中だ。
　相手がゆっくり手作りする間に、細かく重ねていくしかない。

「コイツからだな」
「……じゃあ、これだ」
ゲームでクラスメイトやゴールドシップとヒートアップするフェスタを見ることは多いが、俺の前でそう騒ぎ立てることはない。あくまで勝負に徹するフェスタは静かに、淡々と、それでいて熱意は秘めたプレイングをする。レースでも彼女はそうだ。クールで、冷徹で、ずっとつまらなそうな顔をして、しかし勝負には人一倍懸けているものがある。
フランスでの彼女が本来の彼女なのだろう。
1度目の凱旋門賞、彼女はたったの4分の3バ身を詰められなかった。日本では一番世界に迫った、とか、日本初の偉業とか囃し立てられたが2度目の凱旋門では見る影もない11着、彼女が世界の頂を掴むことはなかった。
負ければ不機嫌に飴を齧って勝てば愉快と大きく笑い、悔しさを滲ませることがなかった彼女が、はじめて泣いていた。
「悔しいなぁ……」
身体能力のピークを過ぎ、勝てる見込みの薄かった最後の凱旋門、日本をラストランにすることもできたはずなのに彼女がトゥインクル最後に選んだレースがフランスだったのは、あのフランスの敗戦と深い芝を忘れられなかったからなのか。
フェスタがあの時に思っていたことはもうわからない。フェスタは語らなかったし、俺も聞こうとは思わなかった。信頼されていないと言われればそれまでだが、俺は、フェスタが語りたくないならそれでよかった。
フェスタは多くを口にしない。
だが、そんな彼女が俺は好きだ。
カードの擦れ合う音だけが聞こえる。いつのまにかお互いに息を潜め、相手の一挙動すら見逃さないほどに目を凝らす。
「……猪鹿蝶、こいこいだ」
「おう」
運良く役がそろったが、足りないなら続行するしかない。数順、

淡々と手番が回る。よくある膠着状態で、打破するには運がいるような状況。
「……」
一瞬、山札に手を伸ばすフェスタの手がブレた気がした。
「……　あがりだな」
「桜に幕、菊に盃。花見で一杯、あがりだ」
「来週の土曜だ。用意しておく」
勝負が終わるとすぐにガラリと椅子を弾き、いつものようにポッケに手を突っ込んで去っていくフェスタ。
「ありがとうな、相棒」
「……　楽しかったぜ、相棒」
彼女は多くを語らない。彼女が語るのは勝負の中でのみ。
そして案外義理堅い。
「……　イカサマなんか覚えて、まぁ」
若干反った「桜に幕」を見て笑ってしまった。
素直じゃないところがフェスタらしいや。

第六話　ウマドル、春爛漫！（作：ミカヅキウサギ）

スマートファルコン。彼女はトレセン学園に通い、G1レース勝利を目指すウマ娘、その一人。彼女はダートコース、つまり砂場でのレースを得意としていた。

「トレーナーさん！私、皐月賞に出たいの！」

…ダートコースが得意なウマ娘なのだ！皐月賞は芝のレースなのだ！

ただ……結果は残酷だった。

スマートファルコン、皐月賞18着。

「そっか、ファル子、ダメだったんだね」

「……すまない、俺がもっと努力していれば」

「ううん、やっぱり、私はダートで頑張るって、これで気持ちにも整理がついたよ！勝てなかったのはもちろん悔しいけど、でも…私も、いつか…あの舞台に立つんだって、改めて気合も入ったっていうか…」

…だから、そんな顔しないでよ。……私も、泣いちゃうじゃん。

「……」

その夜、とっくに寮の門限も過ぎた時間。

スマートファルコン『ねえねえ、地の分でもちゃんとファル子って呼んでほしいな？』…いや変換面倒だし『でも可愛くないじゃん！いいからファル子に統一！みんなに可愛いウマドルって覚えてもらうことも大切なの！』……一応シリアスシーンなんですがあの…まあいいか…

…ファル子は、こっそりと学園を抜け出していた。

「あははっ、トレーナーさんに…フラッシュさんまで。こんなに連絡なんかしなくても、ちゃんと気づいてるってば…」

トレーナーからはもちろんだが、同室のエイシンフラッシュから

も、何度も連絡が入っていた。規則に厳しく、また友達思いな彼女のことだ、さぞかし心配していることだろう。
でも、今は連絡に何か反応をするつもりもなかった。ファル子は…少し、一人になりたかったのだ。
そのまま河川敷まで、なんとなしに歩いてきてしまった。いつも、ファル子がライブをやってる場所だ。
「桜も、もうほとんど散っちゃったなぁ…」
もうしばらく前だったら、キレイな夜桜が見れたかもしれない。…でも、すぐに散ってしまうのだ。こうして。
「桜花賞に出てたら、キレイなままの桜を見て…それで……何を言ってるんだろうね、ファル子」
……なんで、負けたんだろう。芝のコースが苦手だから？それもあるだろう。ライバルが強すぎたから？まあ、芝レースのほうが人気なのだ。実力者も集まるというものだろう。
「私、どっちで走りたかったんだろう…」
ああ、そうだ。結局自分は、芝レースへの憧憬を捨てきれなかったんだろう。そんな気持ちのままでダートのレースに進むと決めていたのだろうか。
「一体、ファル子は何を考えてたんだろ…ダートで一番になるって、決めてたはずなのに…」

「ッ……うぅ……」
自然と、さっきまで出なかった涙があふれてきた。
やっと追い付いてきたのだろう感情の洪水が、ファル子を襲う。一度認識してしまったら、もう止めることなんてできなかった。ファル子は、さっきまで眺めていた桜の木に、顔をうずめて、何とか声を押し殺す。
もう、どうしたらいいの？

どれくらい時間が経ったのか。気持ちは全く晴れないが、涙だけは出尽くした、ような気がする。ファル子は目元をぬぐってから立ち上がろうとしたが、まだ力が入らないようだ。結局少し逡巡した後、その場に腰かけることにした。

「……」

川の淵には少し、散った桜の花びらが浮かんでいる。ぽつぽつと点いている街灯が、葉桜と川の表面をぼんやりと照らし、しかし遠くは良く見えない。普段のファル子なら『これもこれでいい雰囲気』などと思うところだが、今の彼女には…

綺麗な桜、人が見るところだけ照らされて…いらないところは、夜になれば……何も、見えない。

「……で、そろそろ気持ちに整理はつきましたか？」

「ッ!?」

ぼんやりと景色を眺めていたファル子に、どこかキリッとした木の裏から声がかかった。

「ふ、フラッシュ、さん……いつから？」

「……ふふ、いつからでしょうか？」

そこから姿を現したのは、同室のエイシンフラッシュ。性格は真逆と言ってもいいような彼女だが、不思議とファル子とは仲が良かった。ファル子は、恥ずかしさに顔を赤らめながらガバッと立ち上がって、目線を合わせ、姿勢を整えた。

「あ、あはは…なんだか、恥ずかしいとこ見られちゃったね！……ごめんなさい。連絡あったのに、ちゃんと返事してなくて…」

「ええ、そうですね。何かある時は連絡をする、それが常識です。…まったく、連絡があったのが分かってるなら、私が心配してたのもわかってたんでしょう？」

「うっ……」

フラッシュの性格は、一言でいえば『几帳面』。規則を重んじ、また自分の決めたスケジュールを破ることを嫌う、真面目な人物だ。

そんな彼女が寮の門限を破ってまで探しに来たことから、ファル子

にも心配の気持ちはよく伝わってきた。それと同じくらい、フラッシュにそれをさせてしまったことを…
「……『門限を破ってまで追いかけさせてしまった』とか、考えてません？」
「えっ!?……う、うん。どうしてわかったの…？」
「分かりますよ。どれくらいの期間、貴女のことを見てたと思ってるんですか？」
まだ1年一緒にいるかどうかである。フラッシュは別に、『そういえば1年くらいだけど、まあファルコンさんってあまり頭をはたらかs…裏表のない性格だから』とか考えてない。
「…だから、というわけではありませんが、こうしたくなる貴女の気持ちもまた、分かってるつもりですよ。罪悪感を抱く必要なんかありません。」
「…でも、私たちは友達でしょう？心配くらい、させてください」
そう言ってフラッシュは、少し照れつつも励ますようにファル子に笑いかけた。
「っ…フ、フラッジュざん……!!」
そのやさしさに当てられたのだろうか、気づけばファル子の目からはまた涙があふれていた。
そして、今度は桜の木ではなく、フラッシュに抱き着き、泣きじゃくるのだった。
「……よく頑張りましたね、ファルコンさん」

「……！」
気づけばファル子は、フラッシュにおぶさって道を進んでいた。景色は相変わらず河川敷であることから考えると、そこまで時間は経っていないのだろう。
「あっ、ご、ごめんなさいフラッシュさん！今下りるから…」
急いでそう口にして下りようとしたのだが、フラッシュから返事がなく、また思いのほか力が強く振りほどけない。

ファル子は少しだけ力を込めてもがいてみたが、明らかに抑えられている。フラッシュはどこかを目指しているのだろうか、そのままの速度で歩き続けていた。
「あ、あの～、フラッシュさん？下ろしてほしいんだけど…？」
フラッシュからはまたしても何の返事もなかったが、今度はこらえきれなかったのだろう笑いが少し漏れたのか、クスクスという音が聞こえてきた。
「あー、今笑った！ねぇフラッシュさーん！」
「さあ、何のことでしょう？……それより、見えてきましたよ」
「え？見えてきたって、何が……あっ」
そこにあったのは、ソメイヨシノ等と比べれば規模は小さいものの、固まってしっかりと咲いている桜が…満開だった。
「八重桜……だっけ」
「ええ、正解ですファルコンさん。よくわかりましたね」
「んなっ、ファル子だってこれくらいわかるもん！」
そう、八重桜は通常の桜よりも少し開花が遅い品種が多く、見ごろは四月中旬頃になることもある、そんな品種だった。フラッシュは、わざわざファル子にこれを見せたかったのだろうか、半ば無理やり泣きつかれた彼女を連れてきていた。
「…そう、貴女だって八重桜くらい、知ってるでしょう？」
「そりゃ知ってるよ！……まあ、名前くらいだけど」
そこまでで一旦話を区切り、フラッシュはファル子を下ろして、それから桜の方へ、また向き直る。
「じゃあ、この桜を見てどう思いましたか？」
「まあ、綺麗だなって…」
「普段見ている桜と、どちらが綺麗ですか？」
「え、それは……どっちもおんなじくらい、綺麗だと思うよ？」
ファル子は、桜のほうをチラチラと見ながらも、どちらかと言えばフラッシュのほうを覗き込みながら会話を続けていた。
ここまで会話を続けてから一拍おいて、フラッシュがファル子のほうに向きを変え、少しほほ笑んでこう言った。

「…ええ、私もそう思いますよ」
ファル子には、まだフラッシュが何を言いたいのか察することはできなかった。
「芝レースはかっこよくて、人気があって、綺麗で。…確かにその通りです。私もそれにあこがれているウマ娘の一人ですから。……でも、ダートレースだって同じくらいかっこよくて、綺麗なんです。それを私に気づかせてくれたのは、貴女じゃないですか」
「……そうなの？」
「ええ、そうなんです。八重桜も、身近にないから人気がないだけで、綺麗でしょう？……最後まで言わないと、分かりませんか？」
フラッシュは、微笑みを真剣な顔に変えて問う。

「……誰かが、ダートレースを身近な存在にすれば」
「誰か、じゃないでしょう」
「……ファル子が」
「…まあ、ひとまず合格ってことにしましょうか」
「あはは…手厳しいなぁ」
そっか、ファル子がダートで走りたいって思ったのは。
ダートレースが、キラキラ輝いてたからだった。
その輝きが、あの八重桜みたいにみんなに気づかれてないだけなんだ。だからファル子が輝かせたかったんだ…！
だから、私は、ウマドルになろうって、決めたんだ！

「…フラッシュさん、ファル子、いつかみんなに満開の笑顔を咲かせてみせるよ！」
「ふふっ、そうですね。じゃあ、今日は帰りましょうか」
「うん！…あれ、何か忘れてるような」
……あ。
「ああー！門限どころかもう寮が開いてるかも怪しいじゃないですか

！ファルコンさんのせいですからね！ほら走って！」
「え、てっきりそれを承知で来てくれたんだって思ってたんだけど……」
「そんなわけないでしょう!?ああもう、どうしてくれるんですか！」
「そ、そんなぁー!!」
……結局そのあと、ファル子のトレーナーに何とか説得をしてもらい、寮を開けてもらったものの、みっちりと怒られた2人。
その顔には、満開の笑顔が浮かんでいたという。

――ダートで輝く、トップウマドル！スマートファルコン、行っくよー！

第七話　君と見るあのサクラ（作：暁桃源郷）

春・・・。

それは次第に暖かくなり雪が解け蕾が顔を出す季節。

そんな季節には遡れば奈良時代より始まったとされる日本の文化、花見も一興であろうか。

そんな想いを脳裏に過らせながら新学期そうそうトレセン学園の近所にある河川敷にポツンと一人座り込む少年がいた。

「お空はこんなに蒼いのに・・・・」

この少年、背丈は然程高くはない。

と、言うより低いほうだ。

齢１７にしては人が見れば中学生と思われる身長である。

「・・・・・・チヨのやつおっせぇな～・・・・」

この少年、実はサクラチヨノオーのトレーナーであり、同時にとあるチームのトレーナーだ。

今日はチーム最古参のサクラチヨノオーと花見の約束であった。

もう既にバックレようか、等と思うこの体たらくだが実は最年少のトレーナーと凄いことには凄い。

「おまたせしました！」

声が聞こえてトレーナーが振り向くとそこには風呂敷を携えた当のサクラチヨノオーが立っていた。

「・・・・・・・何それ？」

「三色団子です！」

「・・・・・・・・・・」

これ以上は頭が痛くなりそうなので聞かないことにしたが明らかに明日は太り気味を覚悟して頭の中でトレーニングメニューを考える。

「えっと・・・・、移動しないんですか？」

チョノオーの質問に空を見ながら沈黙し、しばらくしてチョノオーを見る。

「あぁ」

「桜、ありませんけど・・・・」

「花見が桜じゃなきゃいけないって誰が決めたよ。ほら、そこにグラスが好きそうな蒲公英あるだろ」

チョノオーは困った顔をしながらもトレーナーの隣に座り風呂敷を広げる。

実はチョノオー、今回の花見は最近トレーナーの元気が無いことから元気を出してもらおうと連れ出したわけだが正直トレーナーが不調の理由もチョノオーには分かっていない。

チラッとトレーナーを見てみるとずっと無言で三色団子を食べている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ずっと無言の時間が続いていく。

空を浮かぶ雲が何時もより早く流れている。

「・・・・・・・・・・・・・・空はこんなに蒼いのに・・・・」

やっと吐き出したトレーナーの言葉はやはり暗い言葉で何と返していいのか分からない。

「あ、あの！「なんや？トレーナーとチヨノオーやんけ」？」

チヨノオーがトレーナーに話しかけようとすると後ろから聞き慣れた声が聞こえてきた。

「タマモさんと・・・オグリさん」

「おう、ちょいと野暮用でな、それ終わって帰るとこやったんやけどな。それにしてもエライ量の団子やな。二人で食べるんか？」

「まぁな、何なら二人も食べるか？」

「いいのか!?」

トレーナーの言葉にいち早く反応したのはやはりオグリキャップだった。

「あぁ。このままだったらチヨノオーがトレーナーさん考案スーパーハードトレーニングで身体絞るとこだったからよ」

「なら、お言葉に甘えさせて貰うわ」

「あぁ、残したらお団子が勿体ないからな！」

タマモクロスとオグリキャップが座り団子を食べる。

「そう言えばトレーナーはチヨノオーと何してんねん。ピクニックか？」

「・・・・・・・花見」

「花見て・・・桜ないやんけ・・・」

「桜ならある」

タマモクロスの言葉にトレーナーはチヨノオーをちらっと見る。

そのまま視線を空に移す。

「・・・・何かこうしてると昔思い出すな～。家貧乏やったからお父ちゃん買ってくれた団子一玉ずつチビ達と分けてお花見して・・・」

「・・・・・・・・・・・」

トレーナーは三色団子を食べながらタマモクロスの話に耳を傾ける。

それを見ていたチヨノオーが溜め息を付く。

「?どうしたんだ?お腹が空いたのか?」

「あ、いえ・・・・。だだ・・・・・・」

「・・・・・・・・トレーナーはずっと私達の事を考えてくれている」

「・・・・・・・え?」

チヨノオーは驚いた。

基本走るか食べるかにしか興味が無いオグリキャップはあろうことがチヨノオーの思っていることを気付いたのだ。

「きっと悩んでることも私達のことじゃないだろうか」

「そう、ですよね・・・「ダラッシャァァァァァァ!!!!!!」」

タマモクロスの雄叫びが聞こえて振り返るとそこにはタマモクロスとイナリワンに踏まれるトレーナーとそれを笑顔で見守るスーパークリーク。

「イナリ、コイツ簀巻きにして川に放おるぞ!」

「おう!」

二人がトレーナーを担ぎ川に捨てに行く。

「な、何があったんですか!?」
「それが・・・・・・」

これはほんの数分前。
偶然四人を見つけたイナリワンとスーパークリーク。
近付いてタマモクロスを撫でるスーパークリーク。

『ヨーショタマちゃんはいい子ですね～』
『何でウチばっか子供扱いすんねん！イナリかって同じくらいの背やんけ！』
『・・・・・・・・・胸の違いじゃね？』
『・・・・・・・・・・ダラッシャァァァァァァ!!!!!』

「というわけでして・・・」
「それは・・・トレーナーさんが悪いです！」
「そうなのか？」

しばらく三人が団子を食べながらゆっくりしているとトレーナーを川に放おってきたであろう二人が戻ってくる。

「トレーナーはデリカシーってもんが無いんや！」
「んなもん何時ものことじゃあねぇかい？どうせ、直ぐにケロッと帰ってくらぁ」
「ケロッとじゃあねぇ。ぬるっとだ！間違えんな！」
「ほらな」

川に捨てられたはずの癖にドヤ顔で戻るトレーナー

と、それを抱えるバンブーメモリーとヤエノムテキ、更にトレーナーを心配そうに眺めるメジロアルダン。

「ったく、川流された時どうなるかと思ったぜ」

「今度は何やったんっスか？」

「全く記憶にねぇ・・・」

バンブーメモリーに立たされながらトレーナーは頭をかく。

「あ、あの！」

遂に状況が理解できていないチヨノオーが声を上げる。

「私、状況が理解できてないんですけど・・・」

チヨノオーの言葉にトレーナーが考え始める。

しかし、考えると言ってもトレーニングを考えているような悪戯を考えるクソガキのようなイタズラな顔だった。

「そうだなぁ・・・。先ずは何から話そうかね。何か質問・・・の前に皆今日は何してた？」

「ウチは特売」

「私はたくさん食べれると言う大会に行っていた」

「私たちはここにいらっしゃると言う幽霊様に会いに」

「私とイナリちゃんはトレーナーさんに呼ばれて一緒にここに来ました～」

「あぁ、間違いねぇ」

全員が言い終わると次にトレーナーは「じゃあ質問は？」と聞き返す。

すると「では・・・」、とメジロアルダンが手を上げる。

トレーナーが頷いてメジロアルダンに手を差し出す。

「どうして、私はあつめられたのでしょうか？」

「どういう事っスか？」

「私たちは今日偶然ここに居たんです。それなのに今、皆がここに居る」

「確かに、言われて見れば変な話やな・・・。ウチとオグリかて偶然会ったわけやしな」

バンブーメモリーの疑問にヤエノムテキが答え、タマモクロスが更に疑問を呈す。

「ふむ、いい質問だ。流石アルダン。じゃあ、先ずはタマモとオグリからだ。俺は先ずタマモに特売の、オグリには食べ放題のチラシを渡した」

「せやな、だからウチは行った訳やしオグリも・・・」

「あぁ。あのご飯は美味しかった」

トレーナーは苦笑いをしながら次にバンブーメモリーとヤエノムテキ、メジロアルダンを見る。

「次にバンブー達にはここに出る幽霊の噂を流させてもらった」

「で、では！幽霊の話は・・・」

「もちろん嘘ハッタリｎｅｇｏｔｉａｔｉｏｎ」

三人が残念がっているのを見ながら今度はスーパークリークとイナリワンをみる。

「二人はまぁ、仰る通りすぎてなんも無し。うん」

「てやんでぇ！何でぃ、そりゃあ！」

「いや、ごめん」

トレーナーは少し笑って直ぐに空を見上げる。

既にあたりは夕暮れ時で空は穏やかな蒼から燃えるような赤色へと移り変わっていた。

「そ、それで皆さんをここに集めてどうするんですか？それにトレーナーさんがいきなり元気になった理由も気になります！」

トレーナーがチョノオーのその言葉を聞くと笑い出す。
全員がなぜ笑うのか不思議に思っているとトレーナーがチョノオーを撫でだす。

「何だよ。心配してくれてたのか？でも別に俺悩んでねぇよ？」
「で、でも空はあんなに蒼いのにって！」
「あ？あぁ、あれはほら、空は蒼いだろ？でもその向こうにある宇宙って真っ黒だから何でかなーって」

チョノオーは驚いた。
今まで元気がないと思っていたトレーナーは唯々空が蒼い理由を探していただけだったのだ。

「まぁ、んなのはもうどうでも良いんだ。俺が欲しかったのはこれだからよ！」

トレーナーが天高く手を上げ遥か上の空を指差す。
空は既に燃えるような赤から星の光が綺麗に見えそうなそんな黒い夜空へと変わっていた。

「空が、どないしたってんねん？まだ星すら出てないで？」
「自分はもう分かったっス！流れ星が出るまで粘るんスね！」
「！流れ星・・・・・・ッ！」
「ソイツァ粋だねぇ」
「ノンノンノン」

トレーナーが舌鼓をしながらも指を左右に揺らす。

「なんやちゃうんか・・・」
「タマちゃん、ヨシヨシ」
「止めぇ！」

「・・・・ただ、タマ。タマの言った星一つない空、それがいいんじゃあないか！」

トレーナーが空に向かって腕を大きく広げる。

次の瞬間ヒュ～、と言う何かが打ち上がった音が聞こえ、バン！、と空にピンク色の桜の形をした花火が静寂の夜空に咲き誇った。

「っ！これは・・・・」

「桜の花火・・・・？」

ヤエノムテキとメジロアルダンがそう声を漏らしているのを尻目にトレーナーはサクラチヨノオーを見る。

彼女もまた驚きのあまり開いた口が塞がっていない。

「チヨ、お前は言ったな。桜が無いって。でも実はあったんだよ、桜は。この無限に広がる空に！」

サクラチヨノオーがトレーナーを見ると更にトレーナーは畳み掛けるようにサクラチヨノオーに指を突きつける。

「チヨ、次のセリフは『これも計算の内ですか、トレーナーさん』、だ！」

「これも計算の内ですか、トレーナーさ「バクシーンッ!!」」

ほんの一瞬だった。

トレーナーに気が向いてサクラバクシンオーの接近に気付けなかったのだ。

その一瞬が、避けれたであろう運命に衝突したのだ。

「きゃっ！」

「うおっ！」

後ろから来たサクラバクシンオーに突進されたサクラチヨノオーがトレーナーまで吹き飛ばされ二人まとめて倒れたのだ。

「ちょわ！皆さんお待たせしました！皆の学級委員長サクラバクシンオーが桜餅をお持ちしました！」

「こ、これも計算の内ですか、トレーナーさん」

「当たり前だ。この俺は、何から何まで計算尽くだぜ！・・・・って言えたら良かったけどな。流石にこれは計算外」

トレーナーがポケットから盃を取り出して中にカルピスを入れる。それを少し飲み盃を見ると何処から飛んできたのか桜の花びらが浮いていた。

それを見て少し笑うとトレーナーはサクラチヨノオーをチラッと見て桜が満開の夜空を見る。

そして心の中で歌を呟いた。

桜咲く　一夜ばかしの　花なれば

刹那の時さへ　永久と思ふ

最終話　私が見たあの桜を、私は決して忘れない（作：ＢｕｄＰｉｏｎｅｅｒ）

ごきげんよう。メジロマックイーンですわ！春と言えば、桜。桜と言えば、花見ですわね。隅田公園の桜、上野公園の桜、目黒川の桜・・・上げれば名所はキリがないくらいたくさんの名所がありますわ。

ですけど、これらの名所にも劣らぬ美しさを誇る桜がこの東京には存在しますの。それが、府中市にある日本ウマ娘トレーニングセンター学園、通称トレセン学園の桜ですわ。この桜並木もまた美しいと評判ですのよ。正門から一直線に伸びる桜並木は圧巻の一言ですわ。

今ワタクシはこの桜並木の中を歩いていますわ。あいにく授業中ですから、他には誰もいませんわ。所謂貸切状態ですわね。

「思えば、年月が経つのはあっという間ですわ。みんなとこの桜並木をダッシュしたことがつい昨日のように思い出されますわ。」

改めて自己紹介をいたしますわ。ワタクシの名はメジロマックイーン。名門メジロ家の生まれにして史上初の天皇賞親子３代制覇、天皇賞連覇など、様々な記録を打ち立てた時代の覇者ですわね。

トゥインクル・シリーズを引退した後はその上にあるドリーム・トロフィーリーグに移籍。ここでも数え切れないくらいの偉業を建てた後、メジロ家総帥として後進の指導にあたり、ウマ娘の業界内におけるメジロ家の地位をより盤石なものにしていくなど、その功績はやはり引退しても計り知れないものがありましたわ。

還暦を迎えましたので、今は総帥の座もひ孫に託し、自らは会長に退きましたのよ。ですけど、メジロ家内部でも総統の発言力はまだまだありますわ。

ウマ娘は見目麗しく、歳の割に老けないと言われていますけど、ワタクシももう還暦を過ぎましたわ。自慢の薄い紫がかった髪や尻尾は今では完全に真っ白になってしまいましたわね。それでもプロポーションはよく還暦を過ぎたウマ娘とは思えないほど、とよく社交界では言われていますわね。ですけど、面と向かって言われると

ちょっと恥ずかしいですわ。チーム・スピカに所属していた時が懐かしいですわ。
　そういえば、この桜並木にまつわる話を思い出しましたわ。今日は皆さんにこの桜並木にまつわる物語を話しますわ。そう、あれはワタクシがトレセン学園にまだ在学していた頃の話でしたわね・・・。
　そうして、メジロマックイーンは桜並木をよく見渡せるベンチの一つにもたれかかり、過去を懐かしむようにこの桜の物語を思い出していった。
　～４０年前～
「んんん～♪いい朝ですわね。やっぱり朝日は最高ですわ。」
　４月のある日、メジロマックイーンは寮の自室で目が覚めた。なお、同室のイクノディクタスはまだ寝ている。ゆっくりと布団から出たメジロマックイーンは顔を洗うために洗面台へと向かうためにドアを
「よーマックイーン。今ヒマ？」
　開けて秒で閉めた。ドアを開けたら目の前にゴールドシップがいるなど誰が考えただろうか。いや、誰も考えないだろう。
『何で自室の目の前にゴールドシップさんが?!ま、まままさか、まだ眠気が取れていないかもしれないのかもしれませんわ。いいえ、これは夢ですわ。そうに違いありません。』
　心の中で早口に捲し立てて自分を納得させたマックイーンは、悪い夢を見ているのだと思い、再びドアを開けた。
「なんだよマックイーン。急にドアを閉めるなんてよ～。これでも５６４年もの間無人島を制覇してきた仲だろ～。」
　前言撤回。夢ではなかった。
「なんですの、ゴールドシップさん？ワタクシは顔を洗いに行きたいのですけど。早くそこをどいて下さいませんこと？」
「何だよ冷たいな～。今日はとっておきの話を持ってきたのによ～。」
「大体貴女の持ってくる話は碌なものがありませんわ。まあ、でも話だけなら一応聞きますわ。」
「おっしマックイーン！話が早くて助かるぜ！流石はゴルゴルニウム

を一緒に捜し合った仲だぜ！」
　メジロマックイーンの意にも介さず、ゴールドシップは一人で話を進めていく。大体こういう時は話を聞いてあげないと意地でも動かないということは身にしみて実感しているため、取り敢えず話だけは聞いておくことにした。
「マックイーン、お花見どう？」
「お花見、ですか？」
「そう、お花見。折角桜が綺麗に咲いているからよ、トレーニングするのも大事だけど、花より団子っつーだろ？やっぱりこういう時は息抜きも兼ねてお花見行こーぜ！」
「は、はあ。ですけど、前にスピカのみんなでお花見したでしょう？」
　そして、ゴールドシップが切り出してきたのはまさかのお花見であった。正直マックイーンは安堵半分、困惑半分だった。というのも、既に1週間ほど前にチーム・スピカのみんなでお花見をしたからである。そこで何故再びお花見をしようというのか、これが分からずにいた。お花見はホイホイするものではない。滅多にこそやらないから意味があるのである、と考えるのはマックイーンの持論だ。
「んにゃ、スピカのみんなとお花見をしたのは勿論分かっているぜ。だけどよ、アタシはマックイーン、お前さんと一緒に花見をしたいんだ。ダメなのか？あ、勿論桜餅は作っていくぜ。」
　ゴールドシップは、さながらプロポーズのように捲し立ててきた。ゴールドシップからすれば、何か実態の見えない因果に惹かれるようにマックイーンと絡んでいた。そう、なんだかんだ言ってゴールドシップはマックイーンのことが好きだったのである。
　一方のメジロマックイーンもまた、悩んでいた。理由は、甘味である。実は前回のお花見の際に、ゴールドシップが桜餅を作ってきたのだ。この桜餅が思った以上に美味しく、メジロマックイーンはまた食べたいと考えていた。ゴールドシップは言動や行動こそアレだが、実のところ、根っこは超が付くほどの常識派。そして、桜餅があるということが最後のキーとなった。
「・・・分かりましたわ。あとで詳しく日程を詰めましょう。」

「うっしマックイーン！やっぱり話が早いぜ！」
「勿論、美味しいスイーツ、待っていますわよ。」
「あったり前だぜ！パティシエゴルシちゃんの腕が鳴るぜ!!!」
こうして、珍しい２人だけのお花見が実現したのであった。

～２週間後～
トレセン学園の桜並木。その中にあるベンチの一つに、１人のウマ娘の姿があった。名をゴールドシップという。彼女は既に約束の３０分ほど前にそこに来て、メジロマックイーンのことをずっと待っていた。なんだかんだ言って律儀である。
『なんだよマックイーン。遅いじゃねーか。』
マックイーンが遅いのではありません。貴女が早すぎるだけです。
「んあ？誰かの声が聞こえたんだが。気のせいか？」
ええ気のせいです。
ちょうど満開になった桜が、いい感じにアーチのように咲き誇り、そこだけ別世界のような様用を呈していた。そこにいるのはゴールドシップ唯一人。その傍らには重箱があった。
そして、約束の５分前。
「おはようございますですわ、ゴールドシップ。」
「おうマックイーン。」
今回の主役でもあるメジロマックイーンが現れた。
「んじゃ、始めるか。」
そう言いながら、ゴールドシップは傍らに置いてあった重箱を開けた。
「わあ！」
そこに入っていたのは桜餅だった。大きな重箱のスペースを贅沢に使い、９個置かれていた。それが３段。計２７個の桜餅がそこにあった。
「どうよ。和菓子職人ゴルシちゃん渾身の一作だぞ。」
「一つ、頂いてもよろしくて？というか、変なの入れていませんわよね？」

「いいぜ。だってそのために作ってきたんだからよ。というか、何も入れていないぞ？アタシのこと一体何だと思っているんだよ？」
「ただのハジけたウマ娘ですわ。では、一つ頂きますわね。」
「さらっとヒドい事言ってねえか?!」
　ゴールドシップの言葉を他所に、マックイーンは桜餅を一個頬張る。その美味しさは、まさしく彼女が『渾身の一作だぞ。』と言った通りであった。控えめな甘さの餡に、塩漬けの桜の葉。そして、程よい色に色づけされた道明寺粉が全て巧妙に合わさったまさしく珠玉の逸品である。
「美味しい・・・ですわ！」
「だろ？」
　その美味しさにメジロマックイーンは顔を綻ばせる。誰だって美味しいものを食べれば自然と顔が笑顔になる。気がつけば2つ目、3つ目と手を伸ばしていた。その姿をゴールドシップは微笑ましく見つめていた。その姿はまるで、親を見る子や孫のような目線であった。
「マックイーン。」
「？なんですの???」
「マックイーンってさ、何でも美味しそうに食べるよな。」
「な、ななな何を仰いますの?!」
　急にゴールドシップから言葉をかけられたメジロマックイーンは思いっきり赤面した。それもそうである。誰だって急にそのような言葉を言われれば照れるに決まっている。
「だってよ、マックイーン。そんなに美味しく食べてりゃ、誰だってそう思うさ。」
「そ、そうですの？」
「そうだぞ。」
　ゴールドシップが珍しく真面目にメジロマックイーンに話しかける。誰だって美味しいものを食べれば自然と笑顔になるのはある意味自然の摂理なのかもしれない。そう説明したかったのである。
「それによ、マックイーン。」

「？」
「見てみろよ、これを。」
「こ、これは・・・！」
　マックイーンが見上げると、そこには、美しい満開の桜並木があった。
「桜ってさ、「精神美」「優美な女性」「純潔」という花言葉があるらしいぜ。そう、マックイーンのように美しく優雅なウマ娘こそ、この桜が一番相応しいんじゃないかって、ゴルシちゃんは毎回そう思うのよ。」
「ゴールドシップ・・・。」
「それにさ、身近な桜ほど、見慣れているが故に、その美しさの本質に気づかないものよ。どうだい？この桜の美しさ。」
　桜についてアツく語るゴールドシップに、メジロマックイーンは一人桜餅を食べるのも忘れて聞き入っていた。
「ゴールドシップ。本当に貴女という人は・・・。確かに、この桜の美しさ、全く気づけていませんでしたわね。言われれば、ここの桜が一番美しいですわ。だって、我らが母校の桜なんですもの。」
　メジロマックイーンも、その桜に対する考えを改めつつあった。今までは、単なる学校の桜、という認識にしか過ぎなかった。だが、改めてこの桜を見ると、桜の美しさ、そして、その並木道がとても素晴らしいという物に気づいたのである。
「ふふっ、今日は改めて桜の素晴らしさを再認識した気がしますわ。礼を言いますわ、ゴールドシップ。」
「何のことだか。ゴルシちゃんは単に持論を述べたまでだぞ？」
「それでも本当に素晴らしい持論でしたわよ。」
「余計なお節介だい。」
「あらあら、照れていますの？」
「照れていないやい!!!」
　そう言いながら、ゴールドシップはそっぽを向いてしまった。その頬は、僅かに紅潮していた。もしかしたら、内心嬉しかったのかもしれない。

こうして、2人の不思議な花見は終わったのだった。勿論、桜餅の食べ過ぎで体重が言えないことになったのは語るまでもない。

～現代に戻る～

こんな感じの話ですわ。いかがでした？ワタクシにとっては今でもここの桜はやっぱり一番なのですわ。

「ばあば～」

あら、孫たちが呼んでいますわ。それでは、今回はここでお暇させていただきますわ。また、何処かで会えたらいいですわね。

そうして、『芝の名優』メジロマックイーンは愛しの孫たちのもとへと軽やかな足取りで向かっていった。この光景を見ていたのは昔から変わらぬ桜並木だけであった。